

## 河川工作物アドバイザー会議の経過報告・今後の予定

## 1 河川工作物アドバイザー会議の開催状況

- (1) 平成23年4月14日 平成23年度 第1回河川工作物APを開催  
 (2) 平成23年6月23日～24日 平成23年度 第2回河川工作物AP（現地検討会）を開催

## 2 河川工作物の改良状況（平成22年度末）

河川名	基数	事業内容	工事の状況
イワウベツ川 （赤イ川）	1基	・スリットダム化	スリット化工事終了
羅臼川	1基	・スリットダム化	スリット3本のうち、一本終了。 （23年度完成予定）

※河川工作物WGにおいて改良が適当と判断された13基のうち、12基が改良済みであり、残る1基は改良工事中（今年度完成予定）。

## 3 遡上モニタリングの状況

イワウベツ川、サシルイ川、チエンベツ川でサケ科魚類の遡上状況等を調査し、改良済みダムの上流まで遡上していることを確認。

## 4 河川工作物アドバイザー会議における主な議論

4月に開催した河川工作物APにおいて論点整理をし、6月の現地検討会において議論を進めたところ。（別紙）

## 5 今後の予定

- ①今年度第3回目の河川工作物APについては、改良ダムのモニタリング調査終了後に開催予定。  
 ②最後の改良箇所となる羅臼川については、今年度改良工事終了予定。

## ※参考

## 改良工事実施時期とモニタリング調査計画

河川名	工期	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26
イワウベツ川										
赤イ川	H18～22	▲	★	▲	▲					
ピリカベツ川	H19	●●	▲▲							
ルシャ川		●●								
サシルイ川	H19									
チエンベツ川	H20～21			●	●					
羅臼川	H21～23				●					

▲：改良工事（北海道森林管理局）      ★：改良工事（斜里町）

●：改良工事（北海道庁）      ⇔：遡上モニタリング期間

注) 上記表の▲、★、●は、それぞれ1基の河川工作物を示している。

羅臼川の河川工作物の改良は、1基の工期が3年となる予定。

4月開催 河川工作物A P 論点整理	6月開催 河川工作物A Pにおける左記論点の議論
<p>サシルイ川の改良モニタリングを終了して良いのか？ 魚道改良によってカラフトマス遡上は容易になったが、魚道折り返しブール長が短いことがシロザケ遡上の阻害要因になっている可能性がある。また、シロザケが年々減っている。モニタリングの継続が必要ではないか。</p>	<p>シロザケの遡上が少ない要因については、遺伝的要因や河口付近での捕獲数にもよると委員より指摘。今年度でいったん終了し、以降、5年または10年周期でのモニタリングの実施を検討。</p>
<p>流路工・帯工・玉石連結工などについては検証が必要ではないのか？ 流路を固定すると産卵環境ができなくなる。これらの工事は当初の目的を達成しているのか、世界自然遺産地域にふさわしい工事だったのか。</p>	<p>指摘を受けたイワウベツ川赤川イ川において、平成24年度より工作物に係るモニタリングを3年間実施し検証していくことで事務局より説明。モニタリング方法及び検証に当たっての指標については、今後、各委員のご意見を伺うことを確認。</p>
<p>羅臼川砂防ダム改良工事にもなって上流側の土砂をどう扱うべきか？ 羅臼川はサケの遡上が旺盛である反面、産卵環境は非常に少ないので、流下してくる礫が重要。このため、既に実施されている産卵床と遡上数の調査結果や昨年12月に流出した土砂の堆積状況等の調査などを通じた検討が必要。</p>	<p>平成21年12月に3本のスリットの内、1本を施工。ダム上流については、平成22年秋調査において、産卵床なし、遡上数シロザケ1匹、サケラマス3匹を確認。 昨年12月3、4日の大雨による土砂流出後の状況については、1月2月8日にダムから河口まで踏査を行ったところ、この間で顕著な堆積・侵食は確認されていない。 下流の河川環境に考慮し、ダム改良工事における上流側の掘削は最低限にとどめるとし、改良中のダムの魚道部分に溜まった土砂については、シロザケ等の遡上に影響が出るようであれば対応することとした。</p>
<p>長期モニタリング対象河川にはルシヤ川を含めるべきではないか？ イワウベツ、ルサ川、ホロベツ川はとも周辺部であり、遺産中心部の河川、特にIUCNも注目しているルシヤ川での調査が必要。</p>	<p>事務局より、新たに長期モニタリング対象河川（案）として、ルシヤ川、ルサ川、ホロベツ川を提案。 委員より人為的なくらんが少ないテッパンベツ川でのモニタリング要請があり、事務局として次回の河川工作物A Pまで預かりとした。</p>
<p>サケ遡上に関する長期モニタリング手法としてふさわしく、かつ現実的な手法はどのようなものか？ IUCNの報告内容等からみれば、産卵環境収容力と正確な遡上数を把握できる調査手法の採用を検討すべき。ただし、予算上の制約などもある。調査間隔を長くするなど簡略化の検討も重要。 17cm以上のオシヨロコマは海と川を行き来することからバイオマスを正確に評価するのが難しい。しかし、温暖化の有効な指標であることから、およその増減を手チェックできるような手法はないか。</p>	<p>事務局より、サケ遡上調査手法（案）として、遡上数と降下数に基づく調査（台形近似法調査）及び産卵床調査を提案。台形近似法調査については何うことを確認。 日本森林技術協会より林野庁事業である気候変動影響のモニタリング等事業のうちオシヨロコマ調査計画（案）を説明。本事業が4年間で終了するところから、終了後は事務局で引き継ぐことで説明。なお、実施に当たっては予算の事情等から、調査手法及び調査頻度等について引き続き議論していくことで確認。</p>
<p>その他、6月河川工作物A Pの論点</p>	<p>ダムの改良により、サケ科魚類が上流まで上ってこれる環境となった。今後は、上った魚が自然産卵できる環境等についての検討が必要。改良に伴うダムの堆砂については、自然の推移に任せて流すことが好ましい。 今後の河川工作物A Pの方向性や計画についての検討が必要。</p>